

2021.11.21

## ご報告：11/20 第 27 回働学研（博論・本づくり）研究会

十名 直喜

「秋深きとなりは何をする人ぞ」（芭蕉）。各位は、如何お過ごしでしょうか。

秋晴れが続き、紅葉シーズンを迎えるなか、11/20 第 27 回働学研（14～17 時）が、開催されました。

ご参加いただいた下記 21 名に、お礼申し上げます。

（敬称略：池上、太田、小野、片山、聴涛、熊坂、桜井、澤、田中、槌田、程、中谷、中西、中野、波多野、濱、古橋、包、三輪、横田、十名）

本番は 2 部構成で、6 本の研究発表がなされました。第 1 部は濱さん、第 2 部は太田さん、に司会をしていただきました。熱のこもった発表、そして活発な議論が展開されました。

司会の妙と各位のご協力もあって、30 分/本に沿って進めることができましたこと、感謝申し上げます。

### 11/20 第 27 回 働学研プログラム

（総合司会：十名、画面：澤 & 発表 15 分・議論 15 分：計 30 分/本）

#### 第 1 部 持続可能な観光・文化まちづくり（司会：濱）

包 薩出栄貴：「持続可能な循環型観光産業とインフラストラクチャー ―フレイホーショーの観光まちづくりへの視座」

古橋敬一「論じる前に誌す ―アーカイブプロジェクトを軸にしたまちづくりをめぐる」

槌田 洋：「経済グローバル化と持続可能な都市」

#### 第 2 部 公正・共感・つながりの創造経営（司会：太田）

三輪 昭子：「CSR 概念の多様性と史的展開」

桜井 善行：「シニアのペイド・ワークと生き甲斐 ―一人とのつながりこそレジリエンス」

十名 直喜：「『サステナビリティの経営哲学 ―渋谷栄一に学ぶ』出版企画」

6 本の発表の趣旨と論点など詳細は、以降をご覧ください。

12 月、新春の予定についても、＜付記＞に織り込んでいます。

#### <第 1 部>

包さんの発表は、中国内モンゴルのフレイホーショーを事例に、循環型観光まちづくりのあり方を考察したものである。企業による無規制な乱開発のもと、地域の環境や伝統の

破壊が進行するなか、1・2・3次産業連携による循環型観光産業のあり方を対置する。それに対し、全体の趣旨、産業連携と6次産業化の関連などを明確化すべしと指摘がなされた。

古橋さんの発表は、名古屋港まちづくりの10数年の歩みを、アーカイブプロジェクトを通して考察したものである。宮本常一、柳田國男、渋沢敬三などの視点をふまえ、聞き書きを通して解きほぐし主体形成への手がかりを見出していく。それに対し、主体形成のあり方、まちづくりとは、再構築とは何か、聞き書きのあり方等をめぐって議論がなされた。

植田さんの発表は、スウェーデンの都市（イエテポリ）を事例にして、企業のグローバル化と持続可能な都市づくりのあり方を、「開かれた複合体」の視点から考察したものである。「開かれた複合体」、分散と集中、都市の独立性と連携、世界企業ボルボのEV戦略と行政との関係、難民受け入れと多文化社会、労使関係などをめぐって議論がなされた。

三輪さんの発表は、博士論文の全体構想をふまえ、歴史的な視点からCSRの定義を問い直したものである。CSRの意義と限界は何か。CSRは企業の免罪符になっていないか。CSRとエシカル消費だけで解決するのか。企業、個人だけでなく行政を含む、より広い視点から相対化して捉え直すとうなるか、などをめぐって議論がなされた。

桜井さんの発表は、定年退職後のシニアへの「仕事」のすすめとその意義を、多様な視点から考察したものである。無償と有償の違いと関連。なぜ「仕事」か、労働といわないのか、両者の違いは何か。3つの目的（糧、健康、生き甲斐）は「人とのつながり」＝「富」の機能、等の指摘がなされた。波多野さんからメールで興味深いコメントあり（添付）。

十名の発表は、『サステナビリティの経営哲学』出版について、趣旨と全体像、および出版の企画からGOに至る1カ月余の経緯を説明したものである。SDGs＝「大衆のアヘン」論評価のあり方、サステナビリティ論の光と影、成長・発展・資本主義を問い直す視点、などの指摘があった。いずれも織り込んでいるが、校正にあたって留意したい。

#### <付記>桜井さんの発表に対する波多野さんのコメント（11/20）

桜井さんの「ポジティブ・エイジング」について、発言しようとしたのですが、時間切れでできませんでしたので、もし、機会がありましたら、次のことをお伝えいただければ幸いです。

「ご発表が現実的でたいへん整理されていて、私自身、身につまされるところがありました。

ただ、ご発表の視野が個人の立場に限定されていて、それはもちろん必要で重要なことですが、この問題には社会的に取り扱うべき面も含んでいると思います。

高齢者の立ち位置が問題になってきた背景に家族の変容があると思うからです。人間社会の歴史を大づかみにすると、それぞれの社会が伝統的な形態の家族を維持していた時代には、高齢者にはそれなりに共同体の内部でのポジティブな位置づけがなされていたはずですが。ネガティブには、姥捨てなどの問題もあり、たとえば宮本常一には、家族の中で仕事のなくなった高齢者がその生涯をどう覚悟を持って閉じていくかを見ている作品もありました。

逆に、ポジティブな役割を高齢者に与えている共同体もありました。人類学など、文明

以前の形態を維持している共同体に関する研究では、顕著にポジティブな老人のありようが報告されています。それらは生活共同体の置かれた環境、また、その社会の余命の長短など、条件によりさまざまだったでしょう。それもこれも広い意味で、生活共同体の高齢者対応策です。

では、現在では、何が可能か。桜井さんには、個人としての考え方や行動と並んで、生活共同体としての地域社会が高齢者をどのように処遇するか、という観点からの考察もしていただきたいと思いました。」

#### <付記>

なお、**12/18 働学研**には、3人から発表申し込みをいただいています。

ご発表の方は、十名 (tona@iris.eonet.ne.jp) までお知らせください。お待ちしております。

また、新春の1/22 第29回働学研についても、ご発表を受け付けています。

井手芳美：「」

堀 隆一：「日本の勤勉・勤労思想の経営学的研究 一神代から現代までの社会思想(1)」

小野 満：「」

参加をご希望の方も十名 (tona@iris.eonet.ne.jp) までお知らせください。お待ちしております。